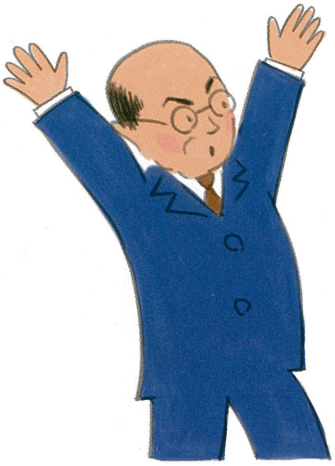
もっと知りたい 武者小路実篤

実篤、欧米へ行く

4人の芸術家と出会う

10月、実篤はフランス・パリで活躍していたマティス、ルオー、ドラン、ピカソを訪ねます。世界的に有名な芸術家と会い、言葉が通じないながらもアトリエで同じ時間を過ごしたことに、実篤はとても感激しました。

パブロ・ピカソ（1881－1973年）はスペイン出身、当時55歳。実篤がピカソの絵や彫刻を見ていると、そばに来て一緒に見てくれたり、別れの時には見えなくなるまで見送ってくれたりしました。実篤は、ピカソのことを優しい人だと思いました。

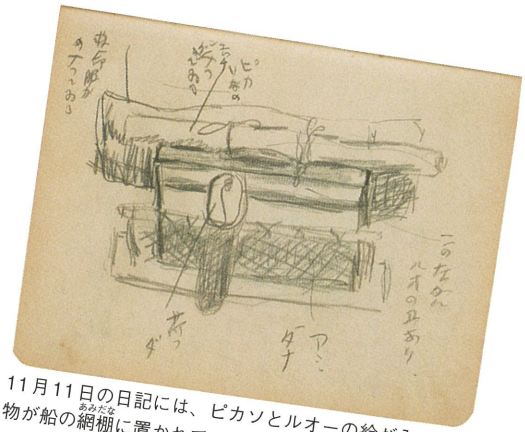


パブロ・ピカソ「ミノトーロマシー」
1935年　エッチング
東京都現代美術館所蔵
その場で「ピカソより武者小路氏へ贈る」とフランス語で署名してくれました。

© 2021 - Succession Pablo Picasso - BCF(JAPAN)

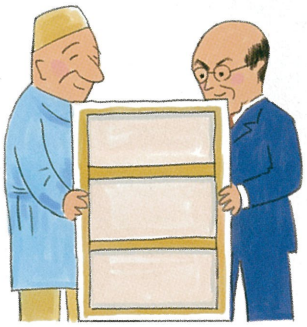
（実篤が絵を見ていると、ピカソが）大きなエッチングを持って来た。…興奮して見ているとピカソは何か言った。高田君（実篤の友達で通訳をしてくれていた）は僕に知らせてくれた。「この画を差上げたいと言うのだ。」…ただ逢えただけでもよろこんでいた、そして画を見られるだけでもよろこんでいる処へ、あげると言われたのだから、喜ばないわけにはゆかない。…僕は画をもらったあとで、気まりがわるかったが名刺がわりにもって来た一本の筆を筆まきにまいたまま高田君からピカソに渡してもらった。…ピカソは日本の筆の使い方を知っていると言った。そして筆まきを珍らしがり、僕の方を見て、何か礼を言って一寸頭をさげた。僕も勿論頭をさげて答礼した。

――『湖畔の画商』より



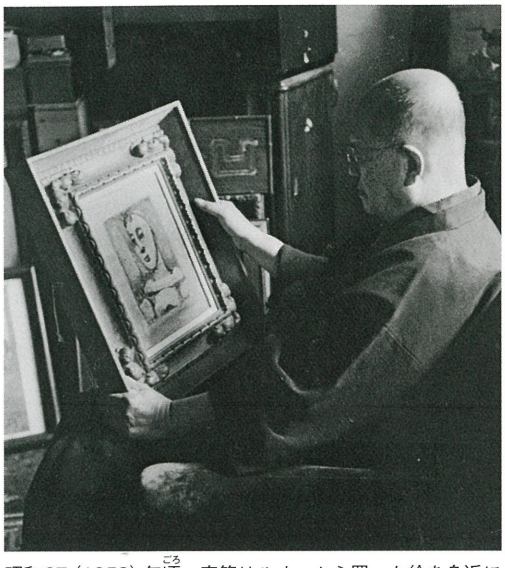
11月11日の日記には、ピカソとルオーの絵が入った荷物が船の網棚に置かれている様子が記されています。

ジョルジュ・ルオー（1871ー1958年）はフランス出身、当時65歳。絵を買うと決めた実篤に、自ら絵を手渡して見せてくれ、2枚の絵で迷った実篤は、より真面目さが感じられる方を選びました。その場で絵に署名し、絵具の乾かし方や絵の持ち方を教えてくれました。



画はさすがにどれも立派で、不思議に美しい、ほしいもの許りだったが、その内、とくにほしいものを一つ手に入れることが出来た。…その画もまだ出来たてのほやほやで、焼芋だったら湯気がたっている処だ。手でふちをもつと絵具が手につくのだ、画をはさんでいる西洋紙には、絵具が一面にぼつぼつくっついている。

——『湖畔の画商』より

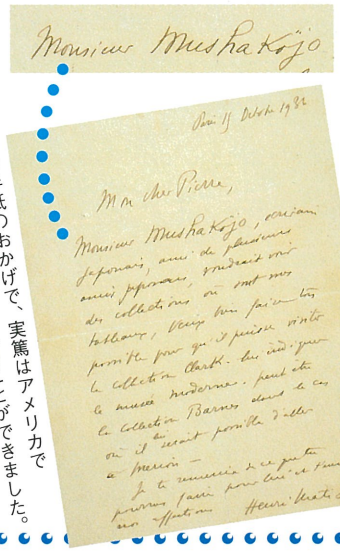


昭和27（1952）年頃　実篤はルオーから買った絵を身近に飾って楽しみ、思い出とともに大切にしました。

アンリ・マティス（1869ー1954年）はフランス出身、当時67歳。挨拶の際にさしだされた手を見て「あの沢山のすぐれた画をかいた手だ」と実篤は思い、尊敬の気持ちを込めて握手しました。静かな老人という印象を受けたと言います。

マチスは自分の彫刻なぞ僕達に手で持つことをすすめ、何年前の作品だと説明してくれた。…僕がマチスの画の沢山ある処を聞いた時、アメリカにあるらしく…アメリカの息子に長い紹介状を即座にかいてわたしてくれた。

——『湖畔の画商』より



「ムッシュ ムシャコウジ」と書かれています。ムッシュはフランス語の敬称（さん・様など）です。

マティスから息子・ピエールにあてた手紙　10月11日

この手紙のおかげで、実篤はアメリカでたくさんの美術作品を見ることができました。

アンドレ・ドラン（1880ー1954年）はフランス出身、当時56歳。自らドアを開けて出迎えてくれたことや、椅子を運んできて、座って絵を見るよう勧めてくれたことに、実篤は友達のような親しさを感じました。のびのびとして美しい作品を見た実篤は、ドランを日本に招いて、日本の風景を描いてもらいたいと思いました。

自分は四人の先輩に逢い彼等の仕事ぶりを見、本気に画の仕事をしている、その素晴らしさを見る。そしてこのことは後世になって見ると相当恐ろしい面白い時代ではないかと思う。そして自分はそう言う人々に逢えたことを悦んでいる。

——『湖畔の画商』より

発行日／令和3年7月17日　企画・発行／一般財団法人 調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
デザイン・レイアウト／今井三樹男　　イラスト／矢口由美子　　印刷／半七写真印刷工業株式会社